令和2年度　文学講演会開催

主催：公益社団法人　上伊那教育会
共催：公益社団法人　信濃教育会
会場：上伊那教育会館講堂

＜演題＞

行きも帰りも伊那路の旅
～高倉健の5代前のおばあさま～

講師　近代文学研究家　堀井　正子　先生

2020.10.17

教育会の職能研修事業では，教師としての専門性を磨くとともに人間性の向上を図り，地域ともども生涯学習の機会とするために講習講演会事業を実施しています。文学研修は，哲学研修，授業研修とともに教育会の三大研修として位置づいています。5 月～9 月にかけて計画していた読み合せ会は中止となりましたが，堀井先生の講演会は感染症対策を行い実施することができました。また，会員と期間を限定し You tube で講演を公開する予定です。

～講演の概要～

俳優の高倉　健さん（故人）は，昭和 33 年，34 年に仕事で善光寺に招かれて以来，善光寺参りを続けてきました。時にはアフリカ，ニューヨークといった海外の仕事先から善光寺へ赴いたほどです。エッセイ「善光寺詣り」の中で，高倉さんは，「しかし，ぼくは行かなくてはすまなかった。どんなに忙しいときでも，この日だけは無条件で善光寺を目指した。今年は忙しいからやめてしまおうか，と思うこともあったが，そう思うだけですでに気持ち悪く，いたたまれない気がして，どんな無理をしても，信濃路を目指した。」と記しています。そんな高倉さんが，自分の５代前の祖母 小田宅子さんが 150 年ほど前に善光寺に来ていたことや，「東路日記」という紀行文を残していることを知り，祖先の霊や宅子おばあさんとの結びつきを強く感じたのでした。

小田宅子（おだ いえこ）さんとは，どのような人物だったのか，なぜ善光寺に来たのか，堀井先生は，貴重な資料を集め，その心情を読み解きながら講演してくださいました。

小田宅子さんは，江戸時代天保 12 年（1841 年）閏１月から６月までの５か月間，主婦仲間４人と共の男性３人を連れて，現在の福岡県北九州市底井野からお伊勢参りを目的に旅をスタートします。宅子さん 53 歳のときです。お伊勢参りを終えた一行は，談判して中津川から馬籠宿，大平峠を経て伊那谷に入り，浅間温泉，善光寺，日光，江戸，鎌倉，甲府，諏訪大社，高遠を経由して再び伊那路を通り，片桐の里（中川村か松川町のあたりか）から秋葉街道，青崩峠を通って遠見の国秋葉山へ詣り，豊川，岡崎，関ヶ原，京都，瀬戸内海へ出て帰っていくのです。お伊勢参りのための通行手

堀井先生のプロフィール

千葉県生まれ
東京教育大学文学部卒業後，高校教員，短大，長野高専，信州大学，中国の武漢大学等で講師を勤める。
現在，県カルチャーセンター，八十二文化財団教養講座の講師，信越放送ラジオ「武田徹のつれづれ散歩道」にレギュラー出演中。信濃毎日新聞「クレソン」の「ことばのしおり」の執筆等を担当。
現在　長野市在住。

＜主な著書＞
「ふるさとはありがたきかな
　ー女優松井須磨子ー」
「戸隠の絵本」
「源氏物語　おんなたちの世界」
「ことばのしおり」
「ことばのしおり　其の弐」
「日々 ことばのしおり」
「出会いの寺 善光寺」など

形だったので、大きな関所を通らない旅路となりました。1日に30㎞程を歩き通す，往復３２００キロの歩き旅です。そんな旅の中で，宅子さんが善光寺でよんだ歌からは，親子の愛を深く大切にする人柄や心情が読み取れます。

たらちねのためにたむくるともしびの
うちにも見まくほしきおもかげ
（親のために手向ける灯火の光で見たいと思うのだ
両親の面影を）

きくらんとおもへばうれし
なき親もなき子もなきてとなへけるなを
（聞いているだろうと思うとうれしい
亡き親も子も　私が泣きながら呼びかける名を）

なき玉の目にも見ゆらん
みな人の御法の声にそへてなげゝば
（亡くなった人が目に見えるのではないか
お籠もりするみんなが経を唱えながら
こんなに会いたいと嘆くのだから）

宅子さんは，往復800里の旅で，たくさんの神社仏閣をお参りしているのですが，無き父母や子に会いたいという思いで祈れたのは善光寺だけだったようです。善光寺でお籠りすれば親しい亡き霊に出会えると大勢の人々が思っていた背景があります。善光寺では当時，本堂の内陣（畳の間）で大勢の人が一晩中経をとなえながら「お籠もり」することが許されていました。大勢の人がお籠もりをしていると，やがて読経の声がひとつになって夜の本堂に満ち満ちていきます。宅子さんは泣きながら亡き人の名を呼んでいました。宅子さんの歌から，亡き人たちが自分の声を聞いてくれているのではないかという哀切な思いが伝わってきます。

～参加者の感想～

先日，堀井先生の井月に関する考察をお聞きし，ここ伊那谷に井月を受け入れ共に風雅を楽しんだ人々が多くいたことに驚きましたが，今回の宅子さんのお話でも，江戸時代に九州から関東まで歩いて往復し短歌を詠みながら手記として残した人がいたのだと大変驚きました。また，昔の方々の教養の深さ，洞察の深さ，あふれる生命力と人生を自分の道として歩く姿と，今の自分とを比べ恥ずかしい思いにもなりました。とても楽しく興味深いお話でもっとお聞きしたいと感じました。

高倉健さんと，ご先祖のおばあ様のご縁，そしてその方の旅日記。江戸時代の女性の旅路，大変魅力的で楽しく拝聴しました。伊那谷の知っている地名が出る度に昔からその地名があったのだな，似ている地名があるな…と思いを巡らせて，味わうことができました。その時々のエピソード，短歌，今の世界にはないゆったり感と充実感を感じることができました。ありがとうございました。これまでの視点とは違った形で（文学と地図）大変面白かったです。

江戸時代の女性の旅日記というものの存在に驚くとともに，それがあの高倉健さんの５代前のおばあさんというのも驚きでした。妻籠から大平を通って飯田へ抜ける道は通ったことがありますが，それはかなり険しい道のりです。女性の旅であるのでかなりきつい道のりであっただろうと想像できます。行程の中にある和歌から小田宅子さんの思いにふれることができました。昨年に引き続き，知らぬことを知る楽しさを味わえる講演でした。ありがとうございました。

善光寺の見方が広がった気がしました。子ども達と行く長野県学での参考にしようと思いました。また，宅子さんの道中から，伊那路の魅力を再発見できました。私もまだまだ伊那路のことは知らないことが多いのですが，これからもっと勉強していきたいと思いました。ぜひ，来年も堀井正子先生のお話を聞きたいです。

講演によせて

上伊那教育会　会長　小澤　徳夫

つい先日までは「暑い，暑い」と言っていたのに，朝晩は寒いくらいの毎日となりました。季節は一気に進み，木々が色づき始め秋の気配が感じられるこの頃となりました。本来ならば多くの会員や地域の皆様にお集まりいただくところですが，新型コロナウイルス感染症対策として，本年度は人数を制限させていただくこととなりました。

この「文学研修」は，「哲学研修」「授業研修」と並び，上伊那教育会の三大研修として大事にされてきました。ここ数年は，芥川賞を受賞した価値ある文学作品の時代背景や，作者の生き様などを読み通すことで，自らを見つめ直すとともに，登場人物を通して「他者と出会う」ための貴重な時間になっていました。ところが，新型コロナウイルスの影響で，「８月までの事業は中止」の決定をうけ，今年度は読み合わせを行うことができませんでした。

野溝和人先生には，毎年文学研修会の読み合せ会をご指導いただいています。これまで好評だった２作品の全文を読み通す，あるいは芥川龍之介の作品を読むという今年度の構想をお持ちでしたが，かなえることができませんでした。来年度には是非実現させたいと思います。

さて，本日は近代文学研究家，堀井 正子先生に，「行きも帰りも伊那路の旅　～高倉健の５代前のおばあさま～」と題してご講演を賜ります。当初は開催できるか心配されましたが，こうして開催できることをありがたく思っております。ここ２年は宮沢賢治と妹トシにまつわるお話をお聞きしましたが，今年は新たな視点でのお話で，大変楽しみにしております。ご講演をとおして，今年のテーマ「発見・出会い　新たな『わたし』」に近づきたいと思っています。